HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Weak Crossover の現象と代名詞
Author(s)	大野, 公裕
Citation	北海道大學文學部紀要, 34(2), 45-62
Issue Date	1986-03-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33499
Type	departmental bulletin paper
File Information	34(2)_PL45-62.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Weak Crossover の現象と代名詞

大　野　公　裕

0. 数量詞 (quantifier) と代名詞を含む次の (1a) の例は (1b) に示した解釈が可能である。

(1) a. Everyone loves his mother
　　b. for each person *x*, *x* loves *x*'s mother

一方, (2a) は (2b) のようには解釈できない。

(2) a. His mother loves everyone
　　b. for each person *x*, *x*'s mother loves *x*

このように, 代名詞は (1a) のような例では数量詞に束縛された変項として解釈されうるが, (2a) ではそのような解釈は不可能である。(2a) のような例によって例示されるこの現象は "weak crossover" (以下 WCO) と呼ばれ, これまで生成文法理論の枠組みにおいて盛んに議論され, 様々な説明が試みられてきた。本稿では, そのうちの一つである Koopman & Sportiche (1982) の分析を取り上げ, 問題点を指摘し, それに代わる代案を提示する。第1節では, Chao & Sells (1983) の観察に基づき, Koopman & Sportiche の Bijection Principle に代わる条件を提案する。第2節で, この条件のもとで WCO の違反がどのように説明されるかを見たあと, 第3節では, この条件が WCO 以外の事実に関して行う予測をいくつか検討する。以下の議論では, 断りがない限り, 基本的には Chomsky (1981, 1982) で示された理論的枠組みを仮定する。

1. Koopman & Sportiche (1982) は変項 (variable) の定義を(3)のように定め，変項と演算子 (operator) は1対1に対応しなければならないという原則 (Bijection Principle) を提案している。

(3) α is a variable if it is in an A-position and is locally $\bar{A}$-bound.[1]

(4) *The Bijection Principle*
Each operator binds one and only one variable, and each variable is bound by one and only one operator.

この分析によると，(2a)が(1)の場合とは異なり(2b)の解釈が不可能であることは，次のようにして説明される。まず(2a)はS-構造で指標を与えられて(5)の表示を持つ。

(5) his_i mother loves everyone_i

さらに LF で QR (quantifier raising, May (1977) 参照) が(5)に適用し，(6)の LF 表示が派生される。

(6) everyone_i [his_i mother loves t_i]

ここで his と t は(3)の定義によると変項であり，共に演算子 everyone に束縛されているので Bijection Principle (より正確にはその前半の部分) の違反となる。一方，(1a)は次の(7)の LF 表示を与えられるが，his は t に A- 束縛されているので変項ではない。従って Bijection Principle の違反とはならず，(1b)に示した解釈が可能となる。

(7) everyone_i [t_i loves his_i mother]

このように，Bijection Principle による WCO の違反の説明は変項の定義を(3)とすることによってはじめて可能となる。すなわち，(3)の定義には空範疇だけでなく代名詞も変項になりうるということが前提として含まれているが，(4)のように述べられた Bijection Principle が

WCO の違反を排除するためには，この前提が不可欠である。しかしながら，代名詞も変項になりうるというこの前提は少なくとも英語においては支持できないということを以下で示す。[2]

英語の再出代名詞（resumptive pronoun）は周辺的な現象ではあるが，次のような例は多くの話者にとって比較的容認可能である。

(8) I'd like to meet *the linguist* that Mary couldn't remember if she had seen *him* before

(3)の定義によると，このような再出代名詞は変項として解釈されることになる。しかしながら，英語の再出代名詞は変項として解釈されないということが Chao & Sells (1983) で論じられている。彼らがその証拠の一つとしてあげているのは次のような例である。

(9) *I'd like to meet *every linguist* that Mary couldn't remember if she had seen *him* before

(10) **No woman* that Bill wonders whether he should date *her* is really interested in him

もし再出代名詞が空範疇の変項と同じように機能しているのであれば，(9)と(10)は文法的になるはずである。((9)と(10)の再出代名詞を空範疇で置き換えたものは容認可能である。）そうすると，(8)が容認可能であるのは，代名詞 him が変項としての解釈ではなく，何かそれ以外の解釈を受けているためであると考えられる。Chao & Sells はこれは Evans (1980) の言う「E-タイプ」の解釈であると論じている。ここでは E-タイプの解釈についての詳しい議論は避けるが，これがどのようなものであるにせよ，(9)－(10)の非文法性は再出代名詞が少なくとも変項としては機能していないということを示している。[3]

ここで興味深いのは(8)と(9)の対比が WCO の場合にも現われるということである。[4]

(11) I met *the influential professor* that John sent his book

to *t* in order to impress *him*

(12) *I met *every influential professor* that John sent his book to *t* in order to impress *him*

この(8)－(9)と(11)－(12)の平行性は，WCO における代名詞もまた再出代名詞と同じように変項として機能していないのではないかということを強く示唆するものである。実際，このことが正しいことは次の2つの例の解釈の違いから明らかである。

(13) a. John owns *some sheep* that Harry keeps *t* healthy by vaccinating *e* in the spring

b. John owns *some sheep* that Harry keeps *t* healthy by vaccinating *them* in the spring

Chao & Sells によると，(13a)では，ハリーが予防接種をするのはジョンが所有している羊の一部であり，ジョンはその他にも羊を所有していることが含意されるが，(13b) は，ハリーはジョンの所有する羊すべてに予防接種をするという解釈（E-タイプの解釈）しかない。この例から，WCO における代名詞もやはり変項としての解釈ではなく，E-タイプの解釈を受けているということがわかる。

以上，英語の代名詞は変項として機能できないということを示した。これが正しいとすると，WCO の違反の原因は Bijection Principle が主張するように変項が2つ生じているからではなく，代名詞が変項として機能できないからであることになる。さらに，代名詞自身が WCO の違反の原因になっているのであるから，WCO の違反を排除する条件は「変項」に言及すべきではないということが言える。この点においても Bijection Principle による説明は支持できない。[5] また，変項の定義(3)自体も代名詞を変項として認めるという点において支持できないと考えられそうだが，しかしながら，これは正しくない。Chao & Sells が主張するように，再出代名詞が変項として機能している言語が確かに存在するからである。これらの言語（例えば，スウェーデン語やヘブライ

語など）においては(9)－(10)などに相当する例は完全に文法的である。従って，(3)の変項の定義はこのままの形で普遍的に成立すると仮定しなければならない。

以上の議論をふまえ，英語に次の条件が成立するものと仮定しよう。

(14) A pronoun is not locally Ā-bound

(14)は英語の代名詞には変項としての機能がないという事実を最も単純な形で述べたものである。(14)は英語に特有の条件として習得されるのではなく，何かより一般的な原則と英語が持つある個別的な特徴から帰結すると考えるのが自然であるが，ここではこの問題には立ち入らないことにする。

2. この節では，前節で見た WCO の違反や再出代名詞の例が条件(14)のもとでどのように説明されるかを考察する。

まず，次のような典型的な WCO の違反の例が条件(14)によって排除されるのは明らかである。

(15) *Who$_i$ did his$_i$ mother see t_i

(16) a. *His$_i$ mother saw everyone$_i$

b. everyone$_i$ [his$_i$ mother saw t_i]

(16b)は(16a)に QR が適用した LF 表示である。(15)と(16b)で代名詞 his はそれぞれ who, everyone に局所的に (locally) Ā-束縛されているので(14)の違反となる。(16)の例から明らかなように，(14)は少なくとも LF で適用すると仮定しなければならない。(6)

問題となるのは(11)－(12)のような関係節における WCO の例と(8)－(9)のような再出代名詞の場合である。関係節の head が定の (definite) NP と QP (quantified phrase) とで容認可能性に違いがあるのはどのようにして説明されるであろうか。(7) まず WCO の場合から見ていくことにしよう。

(11)や以下の(17)のような関係節は(15)－(16)のような典型的な WCO の違反の例とは異なり，比較的容認可能である。これらは条件(14)だけではなく，これまで提案されてきたどの WCO の違反の説明にとっても問題となる例である。

(17) ?I know the man who$_i$ his$_i$ mother loves t$_i$

Chomsky (1982, note 11) は，関係節一般に Predication の規則が適用すると仮定すれば，この事実は説明されると述べている。以下，この仮定を取り入れることにすると，(17)は(14)の条件のもとでは次のように説明される。まず，(17)の関係節は(14)の条件のために次の LF 表示を持たなければならない。

(18) [$_{NP_i}$ the man [who$_j$ his$_i$ mother loves t$_j$]] (i≠j)

Predication の規則は関係代名詞と関係節を含む NP 全体の指標を一致させる操作であると仮定する。[8] (18)に Predication の規則が適用すると j が i にかわり，(19)の表示（LF′ 表示と呼ばれる）が得られる。

(19) [$_{NP_i}$ the man [who$_i$ his$_i$ mother loves t$_i$]]

(14)の条件は LF でのみ適用するので(19)の LF′ 表示は適格 (well-formed) であり，(17)の容認可能性が説明される。

関係節の head が定の場合はこのようして説明されるが，(12)のような QP の場合も同じようにして説明されると文法的であることになってしまう。しかし，QP の場合は QR の適用を受けるため，例えば(20a)は LF では(20b)の表示になっている。

(20) a. * I know every man who$_i$ his$_i$ mother loves t$_i$
b. [$_{NP_i}$ every man [who$_j$ his$_i$ mother loves t$_j$]]
[I know t$_i$]

そうすると，(20b)はこの時点で次の Scope Condition によって排除さ

れると考えられる。

(21) *The Scope Condition*
A pronoun P cannot be coindexed wifth a quantifier Q unless P is in the scope of Q at LF.[9]

ここで Q の "scope"（作用域）とは Q が c-統御（c-command）する領域のことである。そうすると(20b)の代名詞 his は NP_i の中に含まれているので，c-統御の定義により，その作用域内にはないことになり，従って(21)の違反となる。このように，(20b)は Predication の規則が適用する以前に，LF のレベルで排除されるのである。この(21)の条件は次の(22)のような例を説明するものとして多くの文献で提案されており，(20)のような例とは独立に必要なものである。

(22) a. *The man who everyone$_i$ likes saw him$_i$
b. *His$_i$ mother claims that everyone$_i$ is guilty
c. *His$_i$ mother knows who$_i$ Mary saw t_i

以上，関係節における WCO の場合を見たが，これらは(14)の条件を仮定すれば，あとは独立の動機づけを持った規則や条件によって説明されるということがわかった。次に再出代名詞の場合に移る前に，ここで，以前あげた(13)の２つの例（＝(23)）の解釈の違いはどのように説明されるかを見てみよう。

(23) John owns some sheep that Harry keeps t healthy by vaccinating e/them in the spring

(23)は e の場合，束縛変項としての解釈を持つが，これは QR の適用を受けた次の LF 表示（関連する部分だけを示す）に Predication の規則が適用し，j→i となることで得られる。

(24) [NP$_i$ some sheep [O$_j$ that [... t_j ... e_j ...]]]
[John owns t_i]

（ここで O は空の（empty）演算子である。）しかし，代名詞の場合は，同じように QR を受けると(20b)と同様の LF 表示になるため，Scope Condition (21)の違反として排除されてしまう。この問題の解決としては，この場合，QR を受けない(25)の LF 表示を仮定するのが最も自然であると思われる。

(25) John owns $[_{NP_i}$ some sheep $[O_j$ that $[\ldots t_j \ldots$ them$_i$ $\ldots]]]$

QR は随意的（optional）であるから，QP が QR によって移動されずにA-位置にとどまることは十分ありうる。QR に関する通常の仮定（例えば May (1977)）ではこのような QP は独立の条件によって排除されるのであるが，ここでは，そのような A-位置にとどまっている QP は数量詞としてではなく，指示表現（referring expression）として見なされると仮定することにしよう。[10] そうすると(25)は Scope Condition (21)の違反とはならない。(21)は作用域を持つ QP，すなわち，QR によってĀ-位置へ移動した QP と代名詞との束縛関係を規定するものであるから，A-位置にある QP に適用しないのは当然と思われる。(25)はさらに Predication の規則を受けて j→i となる。このように，(23)の代名詞の持つE-タイプの読みは some sheep がQR を受けないと仮定することで正しく説明される。[11]

次に(8)－(9)の再出代名詞の場合に移ろう。Chomsky (1982) では，再出代名詞を含む関係節が Comp 中に演算子を持つかどうかに関して，両方の可能性が論じられている。しかしながら，条件(14)を仮定すると，英語の再出代名詞の例は演算子を含まないという結論が得られる。なぜなら，以下の(26)のように演算子があると仮定すると，(14)の条件のために演算子は再出代名詞を束縛できないが，これはさらに，Chomsky (1982) で提案されている「演算子は LF で変項を束縛しなければならない」という空虚な（vacuous）演算子を禁止する条件によって排除されるからである。この条件は(26)の他に，(27)のような例も排除する。

(26) *the man [who$_i$ John saw him$_j$] (i≠j)

(27) a. *the man [who John saw Bill]

b. *Who did John see Bill

従って，再出代名詞が現われる英語の関係節は LF において，演算子のない(28)の構造を持つことになる。

(28) [NP$_i$ α [... P$_i$ ...]]

（ここで α は関係節の head，P は再出代名詞である。）そうすると，(8)と(9)の文法性の違いも WCO の場合と全く同じようにして説明される。すなわち，α が定の場合は(28)はこのままの形で適格であるが，QP の場合は(28)は QR を受けるので，やはり Scope Condition によって排除されることになる。[12] このように(8)－(9)の違いは演算子が存在しないと仮定すると正しく説明されるが，もし上の議論に反して，演算子が存在するとしたらどうであろうか。(8)－(9)の関係節は，そうすると，(29)の構造になっていることになる。

(29) [NP$_i$ α [O$_j$ [... P$_j$ ...]]]

(29)は α が定の場合は Predication の規則を受けて j→i となり問題はないが，α が QP の場合は QR を受けても Scope Condition の違反とはならず，そのあと定の場合と同じように Predication の規則を受けるので適格であることになってしまう。(14)の条件があればこの可能性は原理的に排除されるのであるから，この点において(14)の条件は WCO の説明とは独立に支持されると言える。

3. 前節では，WCO の違反と再出代名詞の例が条件(14)のもとで独立の動機づけを持った規則や条件によって説明されることを見た。条件(14)はこの他にも，特に LF の構造に対して，様々な帰結を持つことが予想される。この節では条件(14)が LF の構造に関してどのような予測をする

かを見ることにする。

(30)のような数量詞を2つ含む文はあいまいで，(31)に示した2通りの読みを持つが，(32)はあいまいではなく，(31a)に対応する読み，すなわち，every が some よりも広い作用域を持つ読みしかない。

(30) Every man loves some woman

(31) a. For each man, there is some woman or other that he loves.

b. There is a woman, such that she is loved by every man.

(32) Everyone$_i$ liked some film he$_i$ saw

（以下では，数量詞 Q_1 が Q_2 よりも広い作用域を持つ読みを $Q_1 > Q_2$ と表わすことにする。）この(30)と(32)の違いは一般に次のように説明されている。(May (1977), Higginbotham (1980) などを参照。) まず，(30)の持つ2つの読みは，(30)の2つの QP に QR が適用した結果得られる(33a, b)の LF 表示がそれぞれ (31a)，(31b) として解釈されるとすることで説明される。

(33) a. [every man]$_i$ [[some woman]$_j$ [e$_i$ loves e$_j$]]

b. [some woman]$_j$ [[every man]$_i$ [e$_i$ loves e$_j$]]

一方，(32)も同様に QR が適用すると，(34)の2つの LF 表示が得られるが，(34b)は he が everyone の作用域にはないのでScope Condition の違反として排除される。

(34) a. everyone$_i$ [[some film he$_i$ saw]$_j$ [e$_i$ liked e$_j$]]

b. [some film he$_i$ saw]$_j$ [everyone$_i$ [e$_i$ liked e$_j$]]

従って，適格な LF 表示は(34a)だけとなり，(32)が every>some の読みしかないということが説明される。

ところが，ここで(34a)の LF 表示は条件(14)の違反になっているということにすぐ気がつく。そうすると，(14)の条件を仮定すると(32)には可能な LF 表示はないということになり，従って，(32)は一見(14)の条件の反例になると思われるかもしれない。しかし，この問題は，(23)の説明のところでふれた QP の解釈に関する仮定をここでも引き続き採用することによって解決できると思われる。すなわち，この仮定によれば，some が QR によって移動せず A-位置に残る(35)の LF 表示が可能となる。

(35) everyone$_i$ [e$_i$ liked [some film he$_i$ saw]$_j$]

しかし，このように QR が随意的であると仮定すると，(34)－(35)以外に次の2つの LF 表示も(32)から派生されてしまう。

(36) a. [some film he$_i$ saw]$_j$ [everyone$_i$ liked e$_j$]
b. [everyone$_i$ liked [some film he$_i$ saw]$_j$]

(35)と(36)はいずれも，条件(14)にも Scope Condition にも違反していない。しかし，every が QR の適用を受けずに A-位置に残っている(36a, b)の例は註11でふれた every に関する規定により排除されると考えられる。すなわち，every は数量詞としての機能が本来備わっており，従って，some とは異なり指示表現としては解釈されないと仮定すれば，every は QR によって義務的に Ā-位置に移動しなければならないことになる。(36)がこのようにして排除されれば，(35)だけが(32)の可能な LF 表示として残り，(32)が every＞some の読みしかないということが正しく説明される。(13)

このように，(32)の例は条件(14)にとって問題とはならないことが示されたが，ここで採用した仮定をもう一度(37)として述べておく。

(37) a. QR はすべての QP に随意的に適用する。
b. QR を受けず A-位置にとどまっている QP は指示表現として解釈される。
c. every は数量詞としての機能しかない。

(37b) は言い換えると，QP は QR によって Ā-位置に移動してはじめて数量詞として機能するということである。(37c) の規定は every は some などとは異なり指示表現としての解釈がないということであるから，(37a, b) より，QR は every には義務的に適用するという結果が得られる。[14] (37b, c) はここで議論されているよりももっと広範囲の事実や理論的考慮に照し合わせて検討し，精密化する必要があると思われるが，ここでは一応この形のままで正しいと仮定し，議論を進めることにする。

ここでもう一度，(32) の LF 表示であると仮定した(35)にもどろう。(35) の some は QR を受けずに A-位置に残っているので，(37b) より，指示表現として解釈されることになる。ところで，(32) は every＞some の読みを持つが，このことは (34a) の表示からは明らかであるが，some が数量詞として機能していない(35)の表示ではもはやそのようには言えないことになる。数量詞が指示表現よりも広い（或いは狭い）作用域を持つという言い方は意味をなさないからである。このこともまた条件(14)と (37b) の仮定にとって問題となるように思われる。しかし，(32) が every ＞some の読みになるのは，必ずしも some が数量詞として every と相互作用するからではなく，Haïk (1984) が指摘しているように，some が every に束縛された代名詞を含んでいるからなのである。このことが正しいことは次の(38)の例を考えてみると明らかになる。

(38) a. Everyone$_i$ liked the film he$_i$ saw
　　b. Everyone$_i$ loves his$_i$ wife

(39) a. Everyone liked the film John saw
　　b. Everyone loves John's wife

(38)で every に束縛された代名詞を含む目的語の NP は数量詞ではないにもかかわらず，every の変項が取る値に応じて指示が異なるという意味で，あたかも every よりも狭い作用域を持つように解釈される。つまり，この NP の指示は，束縛された代名詞を含まない(39)の目的語の

NP のように every から独立しているのではなく，いわば every に依存しているのである。(32)もこれと全く同じように解釈される。そうすると，(32)の例は条件(14)と (37b) の仮定にとって問題ではないことになる。むしろ，条件(14)と (37b) の仮定は，上の考察を反映して(32)に対して(38)と平行的な LF 表示を与えるという点で，逆に独立の動機づけを持つと言える。(15)

以上，(14)の条件にとって一見問題となると思われる(32)の例は，実はそうではなく，逆に(14)の条件や(37)の仮定を支持するものであるということを論じた。次に，これとは逆に，(32)に対して(34a)の LF 表示を認める通常の仮定では困難な問題として残る例も，我々の仮定では正しく説明されるということを示す。

次の例は(32)の主語と目的語を逆にしたものであるが，every>some の読みも，some>every の読みも不可能で，非文法的である。

(40) *Some film he$_i$ saw pleased everyone$_i$

通常の仮定では，(32) の場合と同じように QR が両方の QP に適用して，(41)の 2 つの LF 表示が派生される。

(41) a. everyone$_i$ [[some film he$_i$ saw]$_j$ [e$_j$ pleased e$_i$]]
b. [some film he$_i$ saw]$_j$ [everyone$_i$ [e$_j$ pleased e$_i$]]

(41b)は Scope Condition によって排除されるが，(41a) は (34a) と同様に許されてしまう。しかし，これは即座に通常の枠組みにとって問題となるわけではない。なぜなら，(40)は恐らく WCO の違反であると考えられるからである。もしそうだとすると，他の WCO の違反を扱う何らかの条件（これを条件 C と呼ぶ）によって(41a)の LF 表示も排除されることになる。しかし，この条件 C は(41a)と(32)の LF 表示である(42)（= (34a)）を区別できなければならない。つまり，(42)は排除しないが，それと非常によく類似した (41a) は排除できるようなものでなければならない。

(42) everyone$_i$ [[some film he$_i$ saw]$_j$ [e$_i$ liked e$_j$]]

これまで WCO の違反を扱う条件はいくつか提案されてきているが，今述べた要件を満たすような条件 C は筆者の知る限り，通常の枠組みではまだ提案されていない。従って，そのような条件 C が提案されない限り，(32)の LF 表示として(42)を仮定する通常の枠組みにとって，(40)の例は困難な問題として残ることになる。

一方，条件(14)は (41a) を排除し，さらに，残る唯一派生可能な表示(43)も他の WCO の違反と全く同じようにして排除する。

(43) everyone$_i$ [[some film he$_i$ saw]$_j$ pleased e$_i$]

従って，我々の仮定では，(40)に対して可能な LF 表示はないことが正しく説明される。

最後に，条件(14)が少なくとも修正が必要であることを示す例を見ておく。Safir (1984) などで論じられている(44)のような例がそれである。

(44) a. Someone in [every city]$_i$ hates its$_i$ weather
b. *Its$_i$ weather is hated by someone in [every city]$_i$

(44a, b)に対応する LF 表示はそれぞれ(45a, b)である。

(45) a. [every city]$_i$ [[someone in e$_i$]$_j$ [e$_j$ hates its$_i$ weather]]
b. [every city]$_i$ [[someone in e$_i$]$_j$ [its$_i$ weather is hated by e$_j$]]

(45)の表示はどちらも条件(14)の違反として排除されてしまう。これは some が移動しない場合でも同様である。そうすると，少なくとも(45a)の LF 表示を持つ(44a)の例が条件(14)にとって問題であることになる。このように，条件(14)は(44)の 2 つの例を正しく区別できるように何らかの形で修正が必要であると思われる。

4. 以上，WCO の違反を説明するものとして(14)の条件を提案し，さらに，LF の構造に関する条件(14)の予測をいくつか検討した。その際，(37)の仮定を採用することが必要となったが，この(37)の仮定と条件(14)は従来仮定されてきた LF の構造とはかなり異った構造を予測するということが示された。(この点に関しては註15も参照。) この方向が正しいかどうかは今後の LF の研究にとって興味深い課題の一つとなるであろう。また，第1節の終りでも述べたように，条件(14)は英語の文法において成立する条件であるが，これが一般的原則からどのようにして帰結するかということも今後の課題である。

— 註 —

(1) 束縛 (binding) に関する用語の定義については Chomsky (1981, 1982) を参照。

(2) この主張を英語に限っている理由はのちに明らかになる。

(3) E-タイプの解釈については第2節で再び取りあげる。また註(1)も参照。

(4) (1)は，関係節内では WCO の効果が弱まるため，比較的容認可能である。

(5) 同じことは Chomsky (1976) で提案されている (i) の "Leftness Condition" についても言える。

(i) A variable cannot be the antecedent of a pronoun to its left.

(6) 条件(14)はさらに (i) のような "strong crossover" の違反も排除する。

(i) *Who$_i$ does he$_i$ think t$_i$ will win

(i) のような例は一般に WCO の例よりも違反の度合いが強いが，これは，空範疇の機能的定義を仮定すると t が PRO であることになり，束縛理論にも違反するからであると考えられる。

(7) Saito (1985) ではここでの議論とは異なる枠組みにおいて，これらの事実を含めた WCO の違反の説明が試みられている。

(8) これは Chomsky の仮定とは少し異なる。Chomsky は，Predication の規則は (i) のように関係代名詞と head の指標を一致させる操作と考えている。

(i) [the man]$_i$ [who$_j$ John saw t$_j$]

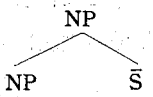
しかし，(i) でhead が指標を持つという仮定は受け入れられないと思われる。なぜなら，(i) の関係節の head は (ii) のような非制限的関係節の場合とは異

なり，それ自体何かを指示しているとは考えられないからである。(Cf. Higginbotham (1980))

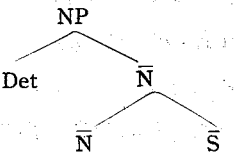
(ii) the man, who John saw, ...

この結論は，制限的関係節に対して，(iii) ではなく，Jackendoff (1977) が主張するように (iv) のような head が単一の構成素を成さない構造を仮定すれば，自動的に帰結する。

(iii)



(iv)



どちらの構造をとるにせよ，以下では，制限的関係節の head は指標を持たないという仮定のもとで議論を進める。

(9) この定式化は Safir (1984) による。

(10) 同じ提案は Chomsky (1981, p.239), Saito (1985, pp. 86-7) などにも見られる。

(11) そうすると，一般に，E-タイプの読みというのは代名詞の先行詞となる QP が QR を受けない場合の読みのことであると考えられる。例えば，(i) においても代名詞は E-タイプの読みしかないが（すなわち，ハリーはジョンの所有する羊すべてに予防接種をする），これも同様に説明される。

(i) John owns [some sheep]$_i$ and Harry vaccinates them$_i$ in the spring

some sheep が QR を受けて移動したとすると，その作用域は and を越えないので，(i) は Scope Condition により排除される。従って，some sheep が移動しない場合のみ (i) は可能となる。これが E-タイプの読みである。

しかし，(12) や (20a) も，もし QR の適用を受けなければ，(25) と同様に Scope Condition の違反とはならず，許されてしまうことになる。これに対しては，Haïk (1984) のように，every は some などとは異なり，数量詞としての機能しかなく，指示的には用いられないという規定を設けることにする。そうすると，every は必ず QR の適用を受けることになり，この問題は解決される。また，(i) と類似の (ii) では，同一指標付与 (coindexing)が Scope Condition により許されず，they の指示が決定されないということになるが，(ii) のような代名詞の指示は文法以外のレベルで扱われると考えるのが妥当であるように思われる。(Cf. Haïk (1984, p. 193), Reinhart (1983,p. 117))

(ii) Everyone$_i$ met her and they$_i$ liked her

(12) (28)で NP と P の指標が一致していないという場合も勿論考えられる。

(i) $[_{NP_i}\ \alpha\ [\ldots P_j \ldots]]$ $(i \neq j)$

そうすると，(i) はこのあと Predication の規則を受ければ，α が定の場合でも，QP の場合でも，許されることになる。しかし，前にも述べたように，Predication の規則は関係代名詞の指標を NP 全体の指標に一致させる操作であるから，関係代名詞のない (i) には適用しないと考えられる。(i) は，そうすると，Comp 中に演算子を持たない (ii) と同じ理由で排除されるのであろう。

(ii) *the man [(that) John saw Bill]

(13) (34a)の表示はまた，Bijection Principle にも違反している。Koopman & Sportiche は QR が (i) のように QP をVP に付加することが可能であると仮定し，この問題を解決している。

(i) everyone$_i$ [S e_i [VP [some film he$_i$ saw]$_j$ [VP liked e_j]]]

しかし，この仮定に対して独立の証拠はあげられていない。

(14) no や each などの数量詞も同様であると思われる。

(15) (35)と同じ問題は some>every の読みを持つ (i) の例に関しても起ってくる。

(i) Someone$_i$ liked every film he$_i$ saw

(i) も(32)と同様に可能な LF 表示は1つしかない。次の (ii) である。

(ii) [every film he$_i$ saw]$_j$ [someone$_i$ liked e_j]

(ここで some は指示表現として解釈されるので，Scope Condition の違反にはならないことに注意せよ。) (ii) でもやはり some は数量詞として機能していないのであるから，(ii) の表示からは (i) がsome>every の読みを持つとは言えないことになる。しかし，いわゆる some>every の読みというのは，some が指示表現として機能し，従って，(iii) における John と同じように every に依存しない読みのことであると思われる。(Cf. Fodor & Sag (1982), Haïk (1984))

(iii) John$_i$ liked every film he$_i$ saw

そうすると，(30)のいわゆる some>every の読みとして(37) の仮定のもとでは (33b) の他に (iv) の LF 表示も派生されるが，今述べたことが正しいとすると，(33b) のほうが排除され，(iv) が正しい LF 表示であるということになる。

(iv) [every man]$_i$ [e_i loves [some woman]$_j$]

REFERENCES

Chao, W. and P. Sells (1983) "On the Interpretation of Resumptive Pronouns," in P. Sells and C. Jones, eds., *Proceedings of NELS 13*, Graduate Student Linguistic Association, University of Massachusetts, Amherst.

Chomsky, N. (1976) "Conditions on Rules of Grammar," *Linguistic Analysis* 2, 303–351.

Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.

Chomsky, N. (1982) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Evans, G. (1980) "Pronouns," *Linguistic Inquiry* 11, 337–362.

Fodor, J. and I. Sag (1982) "Referential and Quantificational Indefinites," *Linguistics and Philosophy* 5, 355–398.

Haïk, I. (1984) "Indirect Binding," *Linguistic Inquiry* 15, 185–223.

Higginbotham, J. (1980) "Pronouns and Bound Variables," *Linguistic Inquiry* 11, 679–708.

Jackendoff, R. (1977) $\overline{X}$ *Syntax : A Study of Phrase Structure*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Koopman, H. and D. Sportiche (1982) "Variables and the Bijection Principle," *The Linguistic Review* 2, 139–160.

May, R. (1977) *The Grammar of Quantification*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts.

Reinhart, T. (1983) *Anaphora and Semantic Interpretation*, Croom Helm, London.

Safir, K. (1984) "Multiple Variable Binding," *Linguistic Inquiry* 15, 603–638.

Saito, M. (1985) *Some Asymmetries in Japanese and their Theoretical Implications*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts.